



(上)関東・東北豪雨災害 鬼怒川が氾濫し孤立した集落＝茨城県常総市若宮戸で、本社ヘリから

(左)ネパール地震 壊滅的な被害を受けた震源地の村バルパク。見わたすかぎりの建物が崩壊した

世界の災害被災者のために

この1年間も国の内外を問わず、大きな自然災害が発生しました。当事業団は、各地の災害被災者の支援のため、毎日新聞と連動して、救援金のご寄付を呼びかけてきました。

ネパール地震救援金 3600万円を贈呈

2015年4月25日にネパール中部でマグニチュード7.8の地震が発生、多くの建物が倒壊し、9000人近くが死亡しました。毎日新聞社と毎日新聞社会事業団はいち早く救援金の受け付けを開始し多くの読者の皆さまから寄付が集まりました。

毎日新聞東京・大阪・西部3事業団に寄せられた救援金は合計3600万円となり、9月までに国連救援機関や現地で救援活動をしている民間団体などへ贈呈し、被災者への支援に役立てられました。

贈呈先は次の通りです。(順不同)▽日本ユニセフ協会▽国連UNHCR協会▽国連世界食糧計画WFP協会▽AMDA▽アジア協会アジア友の会▽AAR難民を助ける会(以上6団体)

関東・東北豪雨災害救援金として 1901万円を贈呈

国内に目を向けると、茨城県常総市の鬼怒川堤防が9月10日午後12時に決壊し、市内では濁流にのまれた2人が死亡、約40平方キロが浸水する甚大な被害をもたらしました。全半壊住宅は約5000件に及び、

市人口の約1割に当たる6223人が一時、避難生活を余儀なくされました。

毎日新聞社と毎日新聞社会事業団は、ただちに災害救援募金を呼びかけ、10月までに3事業団に集まった1901万7924円のうち、801万7924円を日本赤十字社に、1100万円を同茨城県支部に、それぞれ贈呈しました。

台湾地震救援金 602万円を寄託

2016年2月6日未明、台湾南部でマグニチュード6.4の地震が発生しました。台南市で16階建てのビルが倒壊するなど、死者116人、負傷者550人という大きな被害に及びました。

毎日新聞社と東京・大阪・西部の3社会



台湾地震 崩壊したマンションで救出作業にあたる警察、消防の隊員たち

事業団が、この災害への救援金を募ったところ、全国から計594件の寄付が寄せられました。東日本大震災に際して台湾のみなさんからいただいた温かいご支援に、少しでも報いたいというメッセージがたくさん添えられていました。その想いを届けるため、3月11日に台湾の在日大使館に相当する台北駐日経済文化代表処(東京都港区)に沈斯淳代表をお訪ねし、3事業団に集まった総額602万円の救援金をお渡ししました。



熊本地震 益城町役場で救援物資を受け取る避難者ら

熊本地震救援金も続々と 1次贈呈分7000万円を寄託

4月14日夜から熊本県を中心に強い地震が続発し、同県益城町では14日と16日未明の2度にわたり震度7を観測しました。地震発生直後から救援金の受け付けを開始したところ、多くの方から寄付金が続々と寄せられています。

5月末に第1次贈呈分として熊本県などに7000万円を贈呈しました。引き続きご支援をお願いいたします。

災害救援金にご協力いただきました皆さまにあつとお礼申し上げます。

東日本大震災救援金、 2015年度は1200万円を贈呈

死者1万5894人、行方不明者2561人（警察庁、16年3月10日現在）に加え震災関連死者3410人という多くの犠牲を数えた東日本大震災は、その発生から5年がたちました。復興庁によれば現在も

全国で約17万4000人が避難生活を余儀なくされており、復興はいまだ道半ばです。

2015年度は皆さまから東京・大阪・西部3社会事業団にご寄付いただいた、東

日本大震災救援金1200万円を、日本赤十字社を通じて被災地に贈呈しました。これまでの贈呈総額は11億1790万256円となりました。ご協力いただきました皆さまにあつくお礼申し上げます。

【当事業団では救援金を16年度も受け付けます。引き続きのご支援をよろしく願います】

毎日希望奨学金 15年度は215人に支給



毎日新聞社と毎日新聞東京・大阪・西部社会事業団が、東日本大震災で保護者を亡くした生徒や学生を支援する「毎日希望奨学金」は、2015年度も新規支給者76人を含め215人に給付されました。学校別では高校生123人、短大・大学生74人、専修学校生18人です。

発生から2カ月後の11年5月に創設された奨学金ですが、趣旨に賛同いただいた読者や団体からの寄付をもとに運営され、これまでに延べ1013人の生徒や学生に月額2万円を給付してまいりました。引き続き募金にご協力をお願いします。

衆も加わり、恒例となった唱歌「ふるさと」の合唱で心を一つにしました＝写真下。

終演後、出演者たちが自らロビーで呼びかけると、来場者が続々と募金に応じました。



会場募金に立つ松田理奈さん

寄付総額は1億1360万9170円に

日本陶芸倶楽部 チャリティー作品発表展

陶芸の振興と普及を目的に多くのアマチュア陶芸家が集う日本陶芸倶楽部（児玉裕司理事長、東京都渋谷区）は、毎年、会員の作品を展示即売するチャリティー展を開催し、純益を当事業団などにご寄付いただいています。

15年5月に第48回日本陶芸倶楽部会員チャリティー作品発表展（日本陶芸倶楽部、毎日新聞東京社会事業団など主催、毎日新聞社後援）が、日本橋三越本店（中央区）本館6階の美術特選画廊で開催されました（写真）。

今回はアマチュア陶芸家会員240人の独創的な作品を中心に花器や皿など541点が出品されました。

収益金の一部169万2510円は、当事業団の社会福祉事業に寄託され、これとは別に50万円が毎日希望奨学金に寄託されました。

同倶楽部は1986年から毎年、社会福祉への寄託を続けており、今回で総額1億1360万9170円になりました。毎日希望奨学金への寄託も4年連続となっています。



◇毎日希望奨学金

- 郵便振替 毎日新聞東京社会事業団（00120・0・76498）。「奨学金」と明記してください。
- 現金書留 〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1の1の1、毎日新聞東京社会事業団「奨学金」係。
- 銀行振り込み 三菱東京UFJ銀行東京営業部（普通0422292）。

口座名は「毎日新聞東京社会事業団希望奨学金」。

※振込手数料はご負担願います。毎日新聞の地域面で紹介しますので、匿名をご希望の方は「匿名希望」と明記してください。銀行振り込みの方で領収書や紙面掲載をご希望の方は、その旨を明記し住所、氏名、電話番号を書き、振込用紙の写しを添えて郵送かファクス（03・3213・6744）で当事業団へお送りください。



小児がん征圧キャンペーン

第20次は990万円を22団体に

小児がんは15歳以下で発病した白血病、脳腫瘍、神経芽腫、悪性リンパ腫、腎腫瘍などの「がん」の総称です。わが国では毎年2000～2500人の子どもが小児

がんと診断され、子ども10000人に約1人が発症、現在約1万6000人が病と闘っています。

東京・大阪・西部の3事業団に寄せられた2015年度の「第20次小児がん征圧募金」990万円を、小児がんの子どもへ

の支援や研究に取り組む全国22団体に贈呈しました。1996年に毎日新聞社と3社会事業団が「生きる」キャンペーンを開始して以来これまでに贈呈した総額は3億100万円になりました。

贈呈先は次の通りです。(順不同)

がんの子どもを守る会▽そらぶちキッズキャンプ▽白血病研究基金を育てる会▽スマイルオブキッズ▽ファミリーハウス▽メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン▽難病のこども支援全国ネットワーク▽パンダハウスを育て

る会▽小児脳腫瘍の会▽アジア・チャイルドケア・リーグ▽ゴールドリボン・ネットワーク▽チャイルド・ケモ・サポート基金▽日本クリニクラウン協会▽近畿小児血液・がん研究会▽京都大学医学部附属病院小児科ボランティアグループ「にこにこトマト」▽京都

ファミリーハウス▽あいち骨髄バンクを支援する会▽にこスマ九州▽久留米大学病院親の会「木曜会」▽九州大学小児医療センター親の会「すまいる」▽小児がん経験者ネットワーク「シェイクハンズ!」▽宮崎大学医学部小児がんキャンプ実行委員会

音楽家・俳優たちからも熱いご支援続く

2016年で21年目を迎えた「生きる」キャンペーン。趣旨にご賛同いただいた多くのミュージシャン、俳優のみなさんから15年度も大きなご支援をいただきました。



5月23日、世界的バイオリニストの川島成道さんが「グランドファミリーコンサート2015」(毎日新聞社後援)を千代田区の紀尾井ホールで開催。小児がんの子どもと家族ら約30人を招待し、収益の一部をご寄付いただきました。

7月15日、「生きる2015～小児がんなど病気と闘う子どもたちとともに～森山良子



with FRIENDS」が渋谷区のBunkamuraオーチャードホールで開かれました。今年も皇后さまがご覧になる中、森山さんとゲストの大貫妙子さん、憂歌団、小松

亮太さんが力いっぱい歌声と演奏を聞かせてくれました。

元「ふきのとう」メンバーでシンガーソングライターの細坪基佳さんは1月9日の品川区きゅりあん大ホールでの新春コンサ



トで、今年もステージから熱く呼びかけて下さりたくさんの方の会場募金が集まりました。

1月30日、横浜みなとみらいホールで、「クラシック・ヨコハマ 生きる～2016若い命を支えるコンサート」(毎日新聞社な



ど主催)が開催されました。新星のソプラノ歌手、光岡暁恵さんと人気テノール歌手の西村悟さんが歌声を披露し、東京交響楽団有志らでつくる「若い命を支える管弦楽団」が田中祐子さんの指揮で協演しました。進行役の別所哲也さんのトークにも会場は盛り上がり、たくさんの聴衆が

会場募金に参加してくださいました。

小児がん児童のためのチャリティー公演「ごえんなこんさあと」(認定NPO法人「朴の会」主催)が3月13日に渋谷区で



開かれ、ピアノ、チェロの演奏に合わせた女優の竹下景子さんの朗読に約530人の聴衆が聴き入りました。収益の一部を今年も小児がん征圧募金にご寄付いただきました。

渋谷区さくらホールでの恒例となった永井龍雲さんのコンサートは4月17日に行われました。ステージやサイン会で募金を呼びかけただけでなく、今年のご自身がこれまでステージで着用したシャツなどをフリーマーケットで販売し、売り上げをご寄託いただきました。



海外難民 救援キャンペーン

15年度は1080万円を贈呈

皆さまから寄せられた2015年度海外難民救援金1080万円を、国連救援機関や難民支援活動をしているNGO（非政府組織）など24団体に贈呈しました。

毎日新聞社と毎日新聞東京・大阪・西部社会事業団が海外飢餓・難民キャンペーンを始めた1979年以来、これまでに贈呈した救援金は16億503万8344円になりました。

「少女たちの祈り」～ネパールから

2015年度のキャンペーンは、「最貧国で生きる女の子」をテーマに、宗教的、伝統的に女性に対する性差別が根強く残るネパールへ取材チームを派遣しました。「女の子だから」という理由で教育の機会を奪われ、将来を制限され、厳しい環境に追いやられながらも必死に生きる少女たちの姿を伝えるこの連載企画は、国連が女子差別の撤廃を目指して制定した「国際ガールズ・デー」（10月11日）に合わせて掲載され、読者の大きな反響を呼びました。

【手の届かぬ学校】



マグニチュード7.8の大地震に襲われたネパールで、今も復興は進まない。テント村で避難生活を送るアイスカ・ゴルカリちゃん（10歳）。「友達はみんな学校に行ってるけど、私は妹の面倒を見るからいいの」と寂しげにつぶやくが本音は違う。「本当は先生になりたいの」と力なく笑った＝ネパール・バクタプルで

【13歳 恐れていた闇】

血を不浄とするヒンズー教の考えに迷信が重なり、生理中の女性をけがれていて触れてはいけないものとする「チャウパディ慣習」が今も少女たちを苦しめる。初潮を迎え、家族と引き離されて狭い「生理小屋」で過ごすスニタ・コリさん（13歳）。「生理なんて一生こなければよかったのに」と嘆く＝ネパール・サラダ村で



2015年度 海外難民救援金贈呈団体（順不同）

日本ユニセフ協会	すべての子どもたちが健康に、平和な世界で暮らせるようにと政治危機や紛争などで苦難を強いられている人々、とりわけ女性と子供に対して医療、食糧などの支援や教育の普及支援を実施している。
国連UNHCR協会	世界では3千万人が難民や国内避難民になり、困難な生活を強いられている。こうした難民を保護し、食糧支援、自立支援や子供の教育支援をしている。
国連世界食糧計画WFP協会	世界ではおよそ8億4200万人（9人に1人）が飢餓に苦しんでいる。飢餓をなくすため、毎年平均 80カ国以上で9000万人以上に食糧支援を続け、毎年2,000万人以上の子どもたちに学校給食を提供している。
国境なき医師団	紛争、自然災害、難民、感染症の流行などに対して医療・人道援助を行う民間非営利の国際団体。アフリカ、アジア、南米など途上国中心に世界中で活動。
AMDA	世界各地の自然災害発生地で緊急医療活動をしている。ネパール子ども病院への医師・看護師の派遣、医薬品、医療機器の支援をしている。
シェア（国際保健協力市民の会）	タイ東北部のケララートでエイズの予防教育やキャンペーンを展開。差別と偏見のないつくり活動を進めている。
JEN	スーダンやアフガニスタンなど紛争や自然災害で厳しい状況にある地域で給水設備や衛生施設、学校の建設に取り組んでいる。
シャンティ国際ボランティア会	カンボジアやタイで子どもたちに対する人材育成活動や学校建設活動に取り組んでいる。
AAR（難民を助ける会）	カンボジアやアンゴラ、スーダンなどで未だに埋まっている地雷の除去や地雷回避教育、地域保健医療に取り組んでいる。
JVC（日本国際ボランティアセンター）	パレスチナやスーダンなどで医療、食糧支援活動を実施。ラオスや南アフリカなどでは自然農業による地域開発を支援している。
ピースウィンズ・ジャパン	アフガニスタン北部の干ばつ地域で飲料水や農業用水の確保、水資源の管理・活用のための調査活動をしている。
緑のサヘル	アフリカ・チャドとブルキナファソで緑が急速に失われている地域の砂漠化防止のための植林事業を実施し、住民が定住できる環境づくりに取り組んでいる。
ワールド・ビジョン・ジャパン	アジアやアフリカで性的搾取を受けたり、危険な場所で働き、路上生活をする子どもたち、障害のために差別される子どもたち、難民キャンプで暮らす子どもたちへの支援活動をしている。
難民支援協会	様々な理由から自分の生命を守るために自国から避難して日本にのがれて来た人々のための支援活動をしている。
ネパール・ヨードを支える会	ネパール・ヒマラヤ山麓の農村地帯の風土病である「ヨード欠乏症」対策に取り組む。
マハム二母子寮関西連絡所	独立後間もないバングラデシュで日本人僧侶により生活に苦しみ未亡人と子どもたちの生活・就学支援の母子寮が作られた。現在も約100人の子どもが生活し、学校に通っている。
ハイチ友の会	95年設立。コレラ・結核対策、教育環境整備、農村開発事業など大地震以前から幅広くハイチへの支援を続ける。
日本ネパール女性教育協会	ネパールにおける女性の教育に関わる調査、研究、政策提案とその実現のためのプロジェクトで、女性の権利擁護と自立を促進し、ネパールと日本の国際協力と平和的共存を推進する。
シエラレオネフレンズ	アフリカ・シエラレオネにおいて、将来を担う子どもたちへの学校教育や給食を支援している。
ラリグラス・ジャパン	ネパールとインドの少女売買春・人身売買の廃絶を提唱し、HIV感染者・AIDS発症者の支援や、障害をもつ女性や子どもをサポートする国際協力NGO。
アジア協会アジア友の会	水の供給事業を中心に、アジア18カ国68地域の現地NGOと提携して、生活や環境、医療や衛生、教育の向上など社会的課題に取り組んでいる。
アイキャン	フィリピンの子どもの生活向上のため、開発プロジェクトの専門集団として人々の生活に入り込み、共に夢をかなえる活動をするNPO法人。
ペシャワール会	パキスタンとアフガニスタンに診療所を開設し、アフガニスタン難民に医療支援を実施。緑化事業として灌漑水路の建設や井戸の掘削に取り組んでいる。
ロシナンテス	スーダンで、医療活動、学校・教育事業、水・衛生事業、交流事業、スポーツ事業に取り組んでいる。

【故郷の歌は「心の薬」】

幼いころ事故で両親を亡くしたバリヤールさん（18歳）。学校に通える 때마다売られ、朝4時から寝るまで家事に追われた。勇気を振り絞って裸足で逃げ出したところを現地のNGOに保護され、今は同じ境遇の子どもたちと寮で暮らす。つらいときも故郷の歌に支えられてきたという彼女の夢は音楽教師になること＝ネパール・カトマンズで





毎日新聞東京社会事業団は、手足の不自由な子どもたちを対象に、毎年夏と冬にキャンプを開催しています。

2015年8月6日から11日までの5泊6日の日程で、「第59回手足の不自由な子どものキャンプ」（当事業団、日本肢体不自由児協会、東京YMCA主催）が、山梨県山中湖村の東京YMCA山中湖センターで開催されました。また16年1月9日から11日まで「第27回 雪と遊ぼう!親と子の療育キャンプ」（当事業団、日本肢体不自由児協会など主催、新潟県南魚沼市後援）が、南魚沼市の八海山麓スキー場で開催されました。二つのキャンプを支えてくださった多くの皆さまに心より感謝いたします。

自然の中で集団生活にチャレンジ



ビッグカヌーを初体験・・・
笑顔がはじける

「手足の不自由な子どものキャンプ」には、障害を持つ小学3年生から高校3年生までのキャンパー44人と、学生や社会人のボランティアスタッフ、医師、看護師ら総勢約100人が参加しました。

いつもと違った遊びや作業・・・ひと夏のキャンプ経験が、子どもたちを一回り大きく成長させました。



富士山バックに「はいポーズ」



みんなでごはん作った
野外調理



「旗上げ」はキャンプ
始まりの大事な儀式



夏はやっぱりプールでしょ

白銀の世界に子どもたち大興奮



そりでいっきに滑り降り気分最高

「雪と遊ぼう!親と子の療育キャンプ」には、首都圏在住の児童16人と保護者、ボランティア、医師など総勢79人が参加しました。

子どもたちが雪の世界を体験できるだけでなく、保護者の皆さんにも、医師ら専門家や他の参加者との交流の中で療育について語り合える貴重な時間を提供します。



初めて乗った上越新幹線



記念撮影 忘れられない雪景色



かまくらの中はあったかい

第45回 毎日社会福祉顕彰

福祉の向上に尽くした個人、団体を顕彰する2015年度の第45回毎日社会福祉顕彰(主催=毎日新聞東京・大阪・西部社会事業団、後援=厚生労働省・全国社会福祉協議会)は、推薦された30件の中から以下の3件(1団体、2個人)に贈られました。10月26日に毎日新聞東京本社で開催された贈呈式で、受賞者に賞牌(しょうはい)と賞金(各100万円)が贈られました。

45回 毎日社会福祉顕彰贈呈式



認定NPO法人「ホームホスピス宮崎」

(理事長・市原美穂さん(68))
=宮崎市

「在宅ホスピス先駆け」 1998年、県内に緩和ケア病棟を設置しようと発足。2004年には民家を活用、病院や福祉施設で受け入れを断られた難病や介護レベルの重い患者が暮らす「かあさんの家」を開設した。「地域で自分らしく生きてもらう」という考え方が新たな在宅ホスピスケアの先駆けとして注目されている。市原さんは「患者のために何ができるのかを常に考えてきた。その姿勢を変えずに今後も取り組みたい」と話す。



芦沢茂夫さん(68)

(「ピーチ&グレープ」代表)
=山梨県南アルプス市

「車いす生活、壁なくす」 車いす生活者の生活環境改善やバリアフリー化に尽力してきた。2010年には障害者とボランティアで支え合う会「ピーチ&グレープ」を設立。県内の飲食店などに協力を呼びかけ、段差にスロープを設置してもらうなどの活動を進めている。両手足に障害があり、車いす生活を送るが、自ら考案した手作りの器具を取り付け、車も運転。芦沢さんは「心の中の障壁をなくすことがバリアフリーだ」と話す。



ワット隆子さん(75)

(「あけぼの会(乳がん患者の会)」会長)
=東京都目黒区

「乳がん患者の支えに」 乳がんの手術を受けたことを契機に、乳がん患者会「あけぼの会」を1978年に設立。次第に家族や医療関係者からも入会するようになり、会員は全国で約3000人を数える。患者同士が社会復帰のために助け合うことと、乳がん検診の呼びかけなどの啓発活動が会設立以来の活動の2本柱だ。「がんという病気が心理に与える恐怖や拒否反応は今も昔も同じ。原点を忘れず、できる限り続けたい」と話す。



●本紙「受賞者喜びの声」より●

感謝の気持ち 母の日・父の日募金キャンペーン

このキャンペーンは2005年に毎日新聞生活家庭面への投書がきっかけで始まりました。親を亡くした読者から母の日・父の日に「贈り物をする相手がない」「カーネーションを見るのがつらい」などの声が寄せられました。毎日新聞社とあしなが育英会は、母の日・父の日をあらためて家族を思うきっかけとすることを提案し、親への感謝の気持ちを、困難を生きる子どもたちへの支援に変える募金制度を立ち上げました。

07年以降「母の日・父の日募金キャンペーン」として、あしなが育英会への寄付をはじめ、児童養護施設の子どもたちへの支援を

継続し、2016年には16年目を迎えます。

15年度は5、6月の紙面キャンペーンに合わせ、東京・大阪・西部3事業団に170件、228万3300円(うち東京は98件135万2600円)の寄付が寄せられました。寄付金の2分の1をあしなが育英会に残りを以下の団体に贈りました。(順不同)

◇NPO法人「交通遺児等を支援する会」、「日向ぼっこ」、「ブリッジフォースマイル」、「児童虐待防止協会」◇社会福祉法人「カリヨン子どもセンター」、「光の子どもの家」◇CVV(社会的養護の当事者支援団体)◇自立援助ホーム「かんらん舎」



歳末助け合い 244施設の子どもたちにプレゼント

様々な事情で年末年始も家に帰れず、クリスマスやお正月を施設で迎える子どもたちが増えています。2015年も東日本の244カ所の民間児童養護施設に、クリスマスプレゼントとしてスポーツ用品や文具・玩具を贈らせていただきました。皆さまの歳末助け合い募金への温かいご支援が形になりました。

15年は脳活キューブ、スロープあそび、ミラクルカメラなどの木製玩具のほか、サッカーボール、バレーボール、フラフープ、カルタ、紙飛行機、けん玉、24色のクレヨン・色鉛筆、お絵かき帳、折り紙など身体を使ってみんなで遊べるものを選びました。

それぞれの施設から、お礼の手紙や絵、手作りのカードなどが続々と送られてきました。子どもたちの元気ががんばる姿がたくさん届いたことを皆さまにもご報告いたします。



路上生活者支援・アルコール依存症 自立支援の各団体にも助成

路上生活者の方々が少しでも温かい年末年始を過ごせるよう、東京都台東区の山谷地区で、ホームレスの人たちに宿泊施設を斡旋している「自立支援センター ふるさとの会」、弁当や日用品を廉価で提供する「山谷兄弟の家伝道所 まりや食堂」、ホスピスケア施設を運営する「さほうのいえ」、無料診療や炊き出しなどを行う「山友会」、宿泊支援・訪問看護事業を行う「友愛会」、横浜市でアルコール依存症からの脱却・自立を支援している「市民の会 寿アルク」の6団体に助成金を贈呈しました。



●路上生活者たちにボランティアで無料診療所 山友会●

ご支援に厚く御礼申し上げます。

山友会では、路上生活をされている方など生活困窮状態にある方のための無料診療所を運営しています。診療はボランティア医師がローテーションで行うという仕組みにより、平日ほぼ常時診療が実施



できるような体制となっています。

昨年度(平成27年度)は延べ1,990人の方が受診されました。ご高齢の患者さんが多いことから、高血圧症、関節痛などの病気の方の割合が多くなっています。

病気を思いながら路上で暮らさざるを得ない方、路上でひとり誰にも気付かれることなく亡くなる方が、この国にいまなお存在してしまっている現実があります。

様々な事情で医療の恩恵を受けられない方が一人でもいる限り、そうしたひとりひとりの患者さんを大切にしながら活動を続けていきたいと願っています。

理事(広報担当) 油井和徳

その他の主催・後援事業

当事業団は、2015年も社会福祉のさまざまな分野で活動しました。その他の主催事業・後援助成事業は次の通りです。

■主催事業

- ◇全国盲学校弁論大会
- ◇「声の点字毎日」の製作、寄贈

■後援・助成事業

【東京ヘレン・ケラー協会への助成】

- ◇点字図書館への助成
- ◇ヘレン・ケラー学院事業への助成
- ◇東京ヘレン・ケラー協会本部への助成
- ◇ヘレン・ケラー記念音楽コンクールへの助成
- ◇海外盲人交流事業への助成

【児童福祉事業】

- ◇交通遺児等を支援する会への助成
- ◇東京都社会福祉協議会児童部会江戸っ子杯の後援と参加賞贈呈

【障害者福祉事業】

- ◇療育ねっとわーく川崎への助成
- ◇肢体不自由児・者の美術展の後援と助成
- ◇わたぼうし音楽祭の後援と助成
- ◇全国盲学校野球大会の後援と助成
- ◇関東聾学校体育連盟大会の後援と賞品贈呈
- ◇日本車椅子バスケットボール選手権大会の後援と助成

- ◇日本ブラインドテニス大会の後援と助成
- ◇「心の輪を広げる障害者理解促進事業」の後援と賞品贈呈

- ◇日本点字図書館のチャリティー映画会の後援と助成

- ◇中途失聴者・難聴者のための読書学習への助成

- ◇わらじの会夏合宿への助成

- ◇全東京ろう社会人軟式野球TDリーグの後援と賞品贈呈

- ◇朗読録音奉仕者感謝行事(鉄道弘済会主催)の後援

- ◇東京都盲人福祉大会の後援

- ◇点字毎日文化賞の後援

【その他の社会福祉事業】

- ◇地域医療研究・実習への助成
 - ・東京慈恵会医科大学疫学研究会
 - ・慶應義塾大学医事振興会
 - ・東京女子医科大学地域保健研究会
 - ・松本歯科大学地域医療研究会
- ◇自殺防止電話相談事業「いのちの電話」への助成
- ◇自殺予防のための治療・相談事業「青少年健康センター・クリニック絆」への助成
- ◇子どもの虐待防止センターへの助成(15年度から)
- ◇福祉団基東京大会の協賛と参加賞贈呈
- ◇高齢社会に生きるボランティア講座への助成

- ◇アジア社会福祉従事者研修修了生助成事業への助成。

子どもの虐待防止センター

幼い子どもの悲しい事件が後を絶ちません。虐待を防止するために、家庭からアクセスしやすい相談の窓口を、と電話相談や母親グループなどの活動を行っています。1991年の活動開始からこれまでに9万件を超える相談が寄せられました。「子どもを守るために親に寄り添う」この活動が孤立し不安な中で子育てをしている方たちを今日も支えています。そして私たちの活動は皆様のご支援に支えられています。心より感謝を申し上げます。

【事務局長・田中聖悟】



チャリティー書展寄託

一般財団法人毎日書道会は毎年1月の「毎日チャリティー書展」の収益金を当事業団に寄託しています。

1985年から続く同書展ですが、16年も1月5～11日に東京銀座画廊美術館で開催さ

れ、毎日書道会の役員や全国の役員書家の作品が展示・販売されました。

これまでの寄託総額は5493万3000円となっています。

また同会所属の書家の皆さんには、それぞれの地元でも様々な形で当事業団への寄託にご協力をいただいています。



ご寄付の方法について

社会福祉寄金、海外難民救援金、小児がん征圧募金は年間を通して受け付けています。当事業団へのご寄付の方法は以下の通りです。

●郵便局でのお振り込み

郵便局に備え付けの払込取扱票(振替用紙)に金額、住所・氏名などの必要事項をご記入のうえ、お振り込みください。送料無しの払込取扱票(振替用紙)をご希望の方は当事業団にご請求ください。

【口座番号】00120-0-76498

【加入者(送り先)】毎日新聞東京社会事業団

※「寄付名」を通信欄に必ずお書きください。

※金額とお名前を毎日新聞の地域面に掲載させていただきます。匿名を希望される方は通信欄に「匿名」とお書きください。

●現金書留でも受け付けています。

●お問い合わせ先

毎日新聞東京社会事業団

〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

電話＝03-3213-2674

FAX＝03-3213-6744

E-Mail＝mai-swff@fine.ocn.ne.jp

ホームページ＝http://www.mainichi.co.jp/shakaijigyô/

書き損じのハガキ・未使用の切手を寄付してください

宛名を間違えたりして使えなくなったハガキやあ

まった年賀ハガキ、引き出しに眠ったままの未使用の切手を寄付してください。書き損じのハガキや未使用の切手は、郵便局で手数料を差し引いて、新しいハガキや切手に交換できますので当事業団の通信用として使わせていただきます。通信費が節約できた分を様々な社会福祉事業に活用させていただきます。

個人情報について

当事業団へのご寄付に際して、知り得た皆様の個人情報は、当事業団からの領収証、お知らせなどの送付や問い合わせなどに使用させていただきます。それ以外には承諾なしに使用いたしません。